

うきにしだより

学校保健委員会

今年のテーマは『起立性調節障害について』



9月20日(水)に学校保健委員会を開きました。土庫病院・土庫こども診療所の医師である三浦基先生をお招きし、「起立性調節障害 理解と対応について」お話を伺いました。

『小児心身医学会ガイドライン集』をもとに、病気の症状や、毎日の生活で心がけることについて話してくださいました。

起立性調節障害は、自律神経の働きが弱くなることで、体を起こした時に身体や脳への血の流れが低下する病気だそうです。たちくらみ、失神、朝の起きづらさ、体のだるさ、動悸、頭痛などの症状があらわれます。

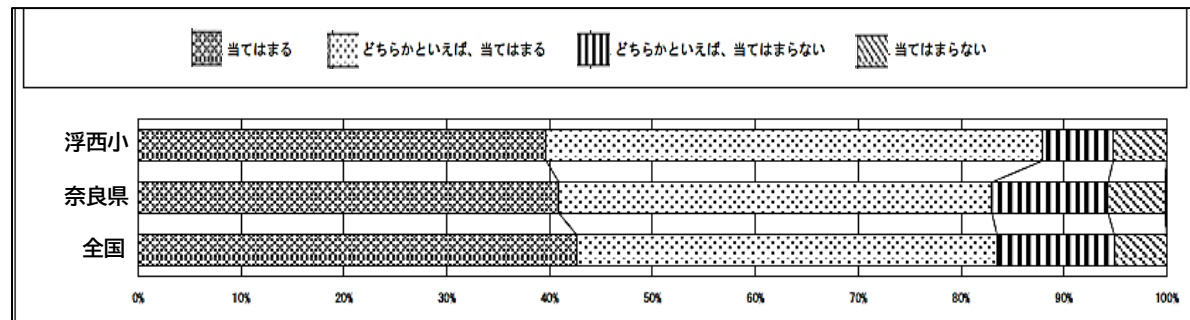
周囲の大人がこの病気のことをしっかりと理解することが、治療のまず第一歩。その上で、子どもが「自己効力感＝自分ならできると思う気持ち」をもてるのが効果的なのだそうです。自己効力感とは「やり遂げたという成功体験」「周囲からの励ましや評価」「心や身体の落ち着き」などと関連が深いそうです。また、治療のゴールに向けて、「治療を通じて子どもの成長を促す」という視点を大切にすることで、病気を乗り越えていく経験が、子どもたちの生きる自信につながるのだとも話されていました。

「学力・学習状況調査 児童質問紙」より

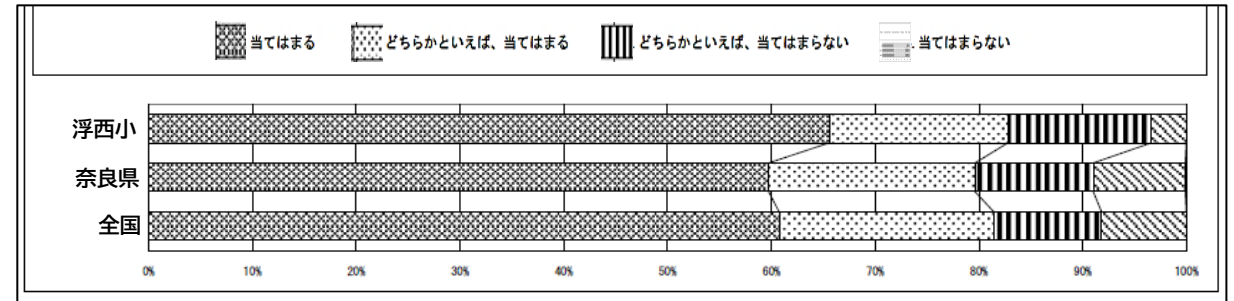
4月18日(火)に全国の6年生を対象に行われた「学力・学習状況調査」において、子どもたちの生活についての次のような質問項目がありました。



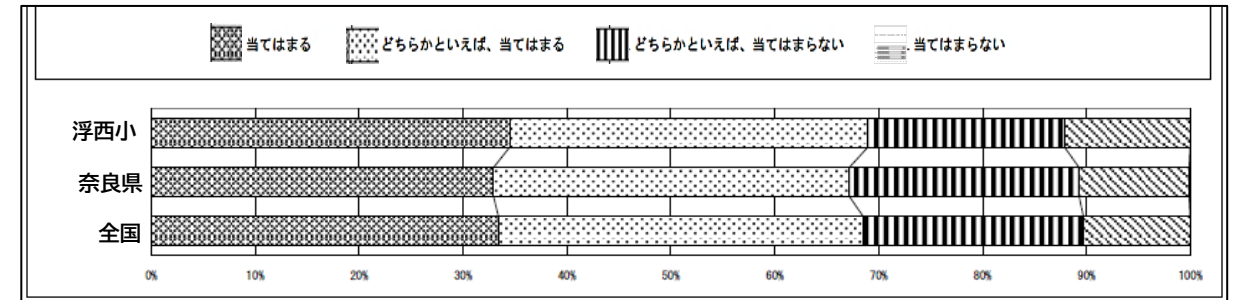
① 自分には、良いところがあると思いますか。



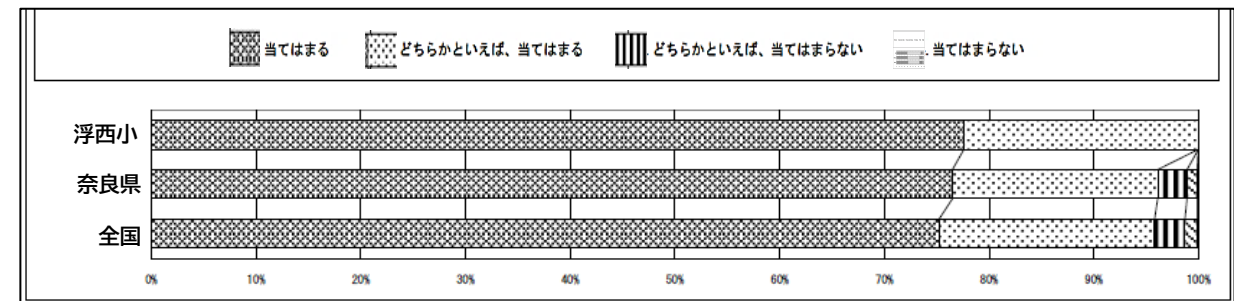
② 将来の夢や目標を持っていますか。



③ 困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか。



④ 人の役に立つ人間になりたいと思いますか。



この調査からは、子どもたちが自分のよさに気づき、将来に向けて夢や目標をもちながら社会と関わりを深めていこうとする積極性が感じられます。

その一方で、学校で困りごとや不安を相談できずにいる割合が3割を超えています。困りごとや不安の内容はさまざまだと思いますが、思春期に差し掛かる子どもたちの特徴として「親や先生から離れて(精神的な自立)」「仲間をつくり(社会性の獲得)」「自分らしさを見つけること(アイデンティティの確立)」が挙げられるそうです。

三浦医師のお話にもあったように、そばにいる大人が子どもの変化に気づき、状況を理解することがまず第一歩だと考えます。その上で、困りごとや不安を乗り越えていく経験を通して、子どもたちの成長を促すという視点を大切にしていきたいと思えます。また、市の教育支援課や片塩中学校のスクールカウンセラー、専門的な医療機関など、相談できる関係機関とも連携を図っていきたくと考えています。